わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

117

生殖医療の落とし穴

「生殖医療」という分野がある。もっぱら不妊治療と同意義のように使われるが、逆に子を作れないようにする医療技術もここに含まれるし、広義では羊水検査のように胎内の子の染色体を調べる行為も生殖医療の範疇に入る。

女性の社会進出などに伴って晩婚化の傾向が強い昨今では、高齢出産が珍しくなくなった。高齢出産とは35歳以上の出産をいうが、35歳どころか、40歳すぎての妊娠・出産もよく耳にするし、最近では芸能人が53歳で妊娠、とのニュースも流れた。

平均寿命が延び、価値観やライフサイクルの多様化が進み、ひと昔前のように結婚適齢期だの子どもを持つべきだの、とうるさく言われなくなった。女性が目に見えない圧迫から解き放たれたのは確かだろう。しかし寿命は延びても、女性の初潮年齢や閉経年齢にさほどの変化はない。女性ホルモンは女性らしさを醸し出し、妊娠を維持するために不可欠であるが、必要以上の女性ホルモンはときに発がん性物質としてみなされる。その点からも、あまりに高齢な、無理な妊娠や出産はリスクを伴い、母子の健康に大きく影響を及ぼす。

北米に、「ハテライト」と呼ばれる一族が棲息している。16世紀に宗教上の理由でヨーロッパから追放され、現在の地にたどりついたといわれる。農業を中心に生活し、避妊などのバースコントロールをしないことを信条としているところから、ハテライトの女性が何歳で、また一生のうちにどれだけ子どもを産むかは、人口史上の自然最大出生力と呼ばれ、人口学においてしばしば引用されている。それによるとハテライトの女性が一生の間に産む子どもの数はおよそ9人であることや、出産年齢は20歳代にピークを迎えること、などがわかる。本来、若い女性にはそれだけの出生力があるということになる。

近年、医学技術の進歩により、高齢な女性でも妊娠・出産が可能になった。もちろんそれは驚くほど成功率の低い話だが、おめでたい話題であるせいか負の面はほとんど触れられず、もっぱらハッピーな出来事として注目される。40～50歳になっても妊娠できる、との安易な思いが、さらに人々の傲慢さを生み、子どもを持つためには何をしても許されるかのような雰囲気を作り出し、あげく若い卵子を求めて海外へ行ったり、受精卵を第三者の子宮で育てる代理母なども登場した。

若いころはバリバリ働いて、40歳過ぎて子作りに専念しはじめ、出来ないとなったら安易に不妊技術に頼る…。こんな女性たちが増えているのは事実のようだ。しかし、それは明らかに「自然体」から外れている。動物の性の面において極めて無理をしていることになる。

1949年、日本で最初の人工授精が成功した。以後この方法で出生した子は一万人以上にのぼるといわれる。この中には第三者からの精子提供によるケースがあり、成人になってその事実を知らされた子どもたちは、実の父親を求めて苦悩する。不妊の治療技術は、子どものこころを置き去りにしたままひたすら発展を遂げてきたのだ。

自分の遺伝子を残したい、母になりたい、との思いや希望はもちろん叶えられてしかるべきだが、欲張りやエゴはほどほどにしたほうがいい。科学や技術の発達は夢を叶えるものばかりでなく、時に人間を翻弄し、傷つけ、不幸にすることがままあることを忘れてはいけないと思う。

イラスト・伊藤栄章